赤ちゃんの四季（21）　平成18年春

川の字は日本の育児文化

戦後しばらくして、米国のスポック博士の育児書がわが国に導入され、欧米型の育児法がもてはやされました。そのひとつに「うつ伏せ寝」があります。昨今では「うつ伏せ寝」が乳児突然死症候群の要因のひとつであることが明らかにされ、日本古来の育児法である「仰向け寝」が安全であるという、苦い体験を我々はしているのです。

両親の間に乳飲み子を寝かせる姿、「川の字」育児文化もまた日本古来のもので、家族としてのほのぼのとしたあたたかさを感じさせます。ところが、米国小児科学会が昨年10月に発表した乳児突然死症候群（SIDS）の予防に関する見解では、母親と同じベッド寝る「添い寝」がＳＩＤＳの危険性を高めるので、子どもが寝入るとひとりで寝かすことを勧めています。この米国小児科学会の勧告は、従来わが国での伝統的な育児法とは全く逆の見解で正直なところ私自身当惑しています。日本と欧米では「ふとん文化」と「ベッド文化」の違いがあります。ベッドの広さ、マットの硬さ、母親の喫煙、体格などがＳＩＤＳのリスクには関係しています。ふとんなら大丈夫という日本国内での研究成績はまだありませんが、母乳栄養の確立には有利であり、すぐに米国式の育児法に追従するのは如何なものかと思います。

また、米国小児科学会は、おしゃぶりが乳児突然死症候群（SIDS）の予防に役立つという見解も発表しています。その理由としては寝具が顔を覆っても付属部分が鼻を塞ぐのを防いでくれる、喉頭の神経系の発達を促すなどが考えられています。私たち小児科医や小児歯科医は、これまでおしゃぶりは、母乳栄養確立の妨げになる、不潔である、長期にやめられなくなり歯のかみ合わせがわるくなるなどを理由に、できるだけ使わないほうがよいと指導してきました。わが国ではおしゃぶりの有用性を証明したデータがありません。おしゃぶりを無心に吸っている乳児の姿を見ると、ＳＩＤＳの発生率もさることながら、何か哀れさを感じさせられます。